

## 衣料品配給と人絹織物

次の頁に掲げたものは「昭和十七年」発行の、悪名高き「衣料品点数表」である。

年表を調べてみると、人絹織物は、昭和六年、帝人米沢工場でスフと名をつけて生産を開始した。また、東洋レイヨンでも、中空人絹糸生産を開始、日本ベンベルグ絹糸、延岡工場も生産を開始したとなっている。

私事で恐縮であるが、中学校に入った時の制服は、男子は小倉の木綿の服であったし、女学生は紺色のサージの上下の服であった。

それが、何時の間にやら、革靴は「地下足袋」、上下の服は「お下がり」のものも許されたし、女学生もスカートは「もんぺ」に変わった、変化の激しい時代であった。

何故、綿の生地が無くなったのか。

何故、女学生のスカートの生地が無くなったのか。

既に軍部は、来るべき戦争を予定して、軍事物資を貯蔵していたとしか考えられない。

また、このような政策や思想が嵩じて、国民は「人的資源」と呼ばれるようになっていった。

「生めよ 増やせよ」という、スローガンの下で「人的資源」と国民は呼

ばれるようになってしまった。

その例には、妊娠中の婦人には、衣料品切符が他よりも多く配給されるという決まりがあった。

しかし、実際にはガーゼや脱脂綿などは、掛け声のように配給される事は皆無であった。

従って、多くの子女を持つ家庭では、子供たちに着せるものの工面で母親たちは、帯の芯を取り出して「鞆に変えたり」、女学生の「手提げ」に作り変えたりするのが、当然の有様であった。

当時を回想すると「学生帽」は「戦闘帽」と呼ぶ、軍人と同じ物にかわつたし、女子学生は、やがて、夏でも綿に入った、「防空帽」を背中に負っているのが当然のスタイルになってしまった。

お上の「商工省」の出した、「衣料品点数表」は、戦争が苛烈になるにつれて「絵に描いた牡丹餅」になってしまった。

